

第 36 回レジャー・レクリエーション学会大会の口頭発表についての評論

上岡 洋晴¹・本多 卓也²

A comment on the oral presentations at the 36th National Congress of the Japan Society of Leisure and Recreation Studies

Hiroharu Kamioka¹, Takuya Honda²

1. はじめに

長い歴史と伝統を誇り、社会に大きな影響を及ぼしてきた本会をさらに発展させることは学会員すべての願いであろう。そのためには、保健・医療・福祉・リハビリテーション・教育などの様々な学問領域・分野と相互理解を図るためにいわゆる「科学の共通言語」となる自然科学の研究手法による成果の公開が不可欠だと考えられる。

本論は、第 36 回レジャー・レクリエーション学会大会の口頭発表における研究の特徴と課題を総合的に考察することを目的とした。

2. 方法

本論は、2006 年 12 月に開催された第 36 回日本レジャー・レクリエーション学会の発表論文集¹⁾を用いて、その抄録をレビューした。該当する 26 研究の「研究対象」、「研究デザイン（独自の分類）」、「メインアウトカムの定量化の有無」の集約と作図を行った。これにより当大会全体の研究の傾向を把握した。

3. 結果と考察

研究対象としては、「人」が最も多く 15 編であり、主にアンケートやヒアリングによる調査研究であった（表 1）。次いで多かったのが「文献」で 8 編、「プログラム」が 2 編、「研究自体」が 1

編であった。

研究デザインでは、「実態調査」が 12 編と最も多く、事例や活動の「報告」で 8 編、「概念構築・提案」が 3 編と続いている。その他、「介入研究」、「SR」、「ナレーティブ・レビュー」が各 1 編ずつであった。主要なアウトカムの定量化については、11 編（42.3%）でされており、残り 15 編（57.7%）ではされていなかった（図 1）。

本学会の傾向として、「対象 = 人、 デザイン = 実態調査、 アウトカムの定量化 = あり」というパターンが多いことが明らかになった。これに当てはまる研究発表は、10 編（全体の 38.5%）であった。

一方、人を対象としているが、アウトカムを定量化していない研究が 4 編あった。人を研究対象として、アンケートやヒアリングを行っているが、結果を数値化していないために、効果の程度が分からぬ研究となっていた。質的な研究も可能な限り、数値にすることで理解の共有を図る必要があると考えられる。狭義の「質的研究」としては、とくに心理学分野での分析方法が整ってきてている²⁾。こうした新しい方法も、仮説を検証する目的のひとつとして取り入れる必要があるだろう。

人以外を対象とした研究（11 編）では、すべての研究で結果の定量化がなされていなかった。「概念構築・提案」といったデザインの研究では、

1 東京農業大学地域環境科学部身体教育学研究室

Laboratory of Physical and Health Education, Faculty of Regional Environment Science, Tokyo University of Agriculture

2 東京大学大学院教育学研究科身体教育学講座

Department of Physical and Health Education, Graduate School of Education, The University of Tokyo

表1 第36回レジャー・レクリエーション学会大会における口頭発表の特徴

発表No.	代表演者	結論に結びつけるための主な対象	研究デザイン	主要なアウトカムの定量化
1	栗原 邦秋	学生	事例・活動報告	なし
2	山崎 律子	デンマークの高齢者施設とスタッフ・入居者	事例・活動報告	なし
3	廣田 治久	レクリエーション・セミナー参加者	実態調査	あり
4	山下 雅彦	大学生	介入研究	あり
5	高橋 伸	アメリカ合衆国でのキャンプ・オーアトカ(プログラム)	事例・活動報告	なし
6	知念 嘉史	幼稚園保護者	実態調査	あり
7	阿部 純士	スポーツクラブに参加する中・高生	実態調査	なし
8	吉原さちえ	神奈川県内スポーツクラブのキーパーソン	実態調査	あり
9	西野 仁	文献	ナレーティブ・レビュー	なし
10	小池 和幸	レクリエーションのプログラム	事例・活動報告	なし
11	左近 慎平	老人病院在院患者	実態調査	あり
12	草壁 孝治	老人病院在院患者	実態調査	あり
13	吉岡 尚美	デーサービスセンター利用者	実態調査	あり
14	徳田つづる	プール利用者	実態調査	あり
15	油井 正昭	文献・資料	事例報告	なし
16	上岡 洋晴	レジャー・レクリエーションのランダム化比較試験	システムティック・レビュー	なし
17	土屋 薫	文献	構想	なし
18	田中 光	文献	提案	なし
19	田中 暁子	文献	事例報告	なし
20	鈴木 英悟	新聞記事	実態調査	なし
21	劍持 武	文献	概念構築	なし
22	滝口 真	文科省検定教科書	確認・報告	なし
23	竹田 隆行	大分レク協会関係者、参加者保護者など	事例報告	なし
24	佐藤 修大	教員養成大学学生	実態調査	あり
25	鈴木 祐志	小学生スポーツイベント参加者保護者	実態調査	あり
26	横山 誠	指導者養成講習会参加者	実態調査	あり

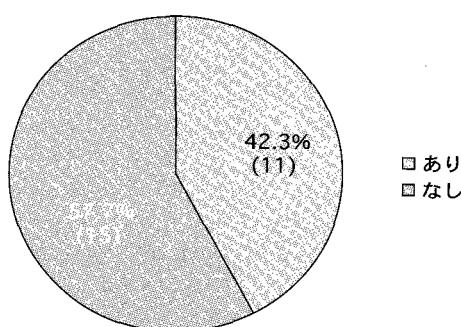


図1 主要なアウトカムの定量化の有無

その時点では結果の定量化はできないのは当然である。しかし、他の「レビュー」、「報告」でもほとんど定量化がなされなかつたことは、学会関係者内外での相互理解には、非常に不利であるとい

えるだろう。

土田³⁾は、科学的に真実である条件として、「第1に現実・現象を説明できること、第2に現実・現象を予測できること、第3に現実・現象をコントロールできること、第4にそれらが全て言語によって表現されていること」を挙げ、その上で、「数字は曖昧さを最小限にして表現することができる特殊な言語」だと述べている。科学的研究には、「思弁・観察・調査・実験」の4段階があるが、実験的方法こそが因果関係を証明する最も有効かつ強力な方法である。

疫学分野では、これを「介入研究」と称している。さらにエビデンス・グレーディング（研究デザインの格付け）が最上位とされている「ランダム化比較試験（以下、RCT）」^{注1)}や「システムティ

イック・レビュー（以下、SR）」^{註1)}による研究が、レジャーやレクリエーション分野において実施されることが望まれる。しかし、この分野においては、「介入（教育）効果は、結果としてすぐに表れるものではない」あるいは「教育の効果を評価するのは医学分野とは異なり困難である」という見解もあるかもしれない。

医学分野では、世界で実施されたRCTをすべて収集し、ある介入による治療効果などを結論づける「コクラン共同計画」⁴⁾が有名である。「保健・福祉・教育・刑事司法」などの学際領域においても、「キャンベル共同計画」⁵⁾が進められており、RCTを選択的・網羅的に収集してSRに基づいて、ある介入効果を評価しようとする取り組みが強力に推進されている。こうした世界の流れを理解しつつ、レジャー・レクリエーション分野でも、「介入に対する適切な評価方法」や「RCTなどのエビデンス・グレーディングの高い研究を行うにはどうすればいいか」といった議論を行うことも、当該分野の学術性を高め、有効な教育手法を伝播する上で必要不可欠だと考えられる。

最後に誤解を防ぐために言及するが、「様々な実践の報告やプログラムの提案、国内外の実践事例の紹介は、新たなレジャーやレクリエーションを創造する上で極めて重要である。それと並行して、仮説実証型により定量化できて、他者でも追試^{註2)}できるような研究も同様に重要である。」というのが本論の端的な趣旨である。

註1) 「ランダム化比較試験」とは、参加者（人）、あるいは集団（クラスター）をランダムに割り付し、介入（教育・指導など）の効果を明らかにする研究デザインのことである。システムティック・レビュー（systematic review）とは、研究テーマや選択基準などを明確に規定し、対象論文を選択的・網羅的に収集する方法で、あるデータベースを用いて、適格基準に従って検索すれば、世界中の誰が行っても同一の論文がヒットすることになる。最終的に収集した研究の結果を統合して、批判的吟味とともに、一定の結論づけを行う論文のことである。RCTのSRは、エビデンス・グレーディングが最上位とさ

れている。一方、従来からの「総説（narrative review）」は、論文の収集・採用時ににおいて、著者の主観的な選択や筆者の考えを支持する論文を選択的に採用する傾向が強いこと、また質の低い論文まで議論の対象とするなどの問題点が指摘されている。

註2) 自然科学の研究では、再現性と普遍性がとくに重要である。例えば、子どもに「あるレクリエーション・プログラム」を実施し、良好な教育効果を得ることができたとしても、もし「特別に優秀な指導者が実施したから、そうした結果となった」とすれば、その「プログラム自体」の有効性はマスクされることになり、他の研究者や実践指導者が模倣したプログラムを行っても、同様の結果を出せるか不明なわけである。これは再現性と普遍性がない可能性が高いことを示している。したがって、この例の場合には、「指導スキルの研究」と「プログラムの効果の検証」を区別しなければならない。前者の「人づくり」の研究も重要だが、後者のように多くの者が恩恵を受けられる普遍性のあるプログラムは、学会員として最も得たい知見のひとつであろう。つまり、他者でも追試験ができるくらい「介入手法（プログラム）、インストラクション、対象者、評価方法、分析方法などの明確化が必要である」という意である。

参考文献

- 日本レジャー・レクリエーション学会、レジャー・レクリエーション研究第57号：第36回学会大会発表論文集、2006
- 日本質的心理学会、質的心理学研究、新曜社、東京、2005
- 土田昭司、社会調査のためのデータ分析入門—実証科学への招待、有斐閣、東京、1994
- コクラン共同計画：アクセス、
<http://www.cochrane.org/>
- キャンベル共同計画、アクセス、
<http://www.campbell.gse.upenn.edu/>